

東洋學報

第參拾九卷第貳號

昭和三十一年九月

論 說

占城國末期の國都と貿易港について

岩 生 成 一

- | | | | |
|---|-------------|---|------------|
| 一 | は し が き | 五 | 朱印船の占城貿易港 |
| 二 | 占城國末期の國都 | 六 | 支那船の占城貿易港 |
| 三 | オランダ船の占城貿易港 | 七 | 占城國終末期の貿易港 |
| 四 | イギリス船の占城貿易港 | | |

一 は し が き

占城國の歴史については、マスペロー氏(George Maspero)の劃期的な業績があるが、主としてその建國以降十六世紀以前に限られて、その末期については、他日の攷究に委ねて、僅に最後の頁に於いて、註に觸れてゐるに過ぎない。(註一)次いで同書の書評を書いたオウルッソー氏(Leonard Arousseau)はマスペロー氏の研究に續く時代に於ける占城關係史料を漢籍中から抜いて列擧し、その解説を試みたが、最後に十七世紀については、僅に東西洋考の書名を紹介しただけで、その

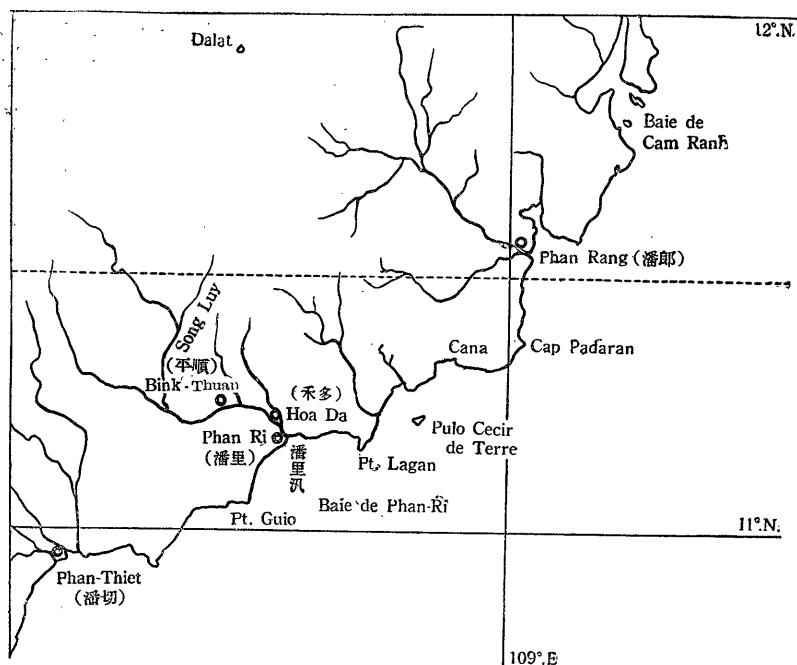
中の關係事項の解説は、又他日を期して終つてゐる。^(註2)これに對してエイモニエー氏 (Etienne Aymonier) の傳説の紹介と、これに基くデューラン師 (E.M. Durand) の研究は、何れも占城國の末路にまで及んでゐるが、主として王統の系譜の研究紹介と都名の解釋にして、その國情に互る點は極めて少い。^(註3)又金永健氏は我が國に於ける諸家の占城史研究を列擧して、更に内外の史料に基いて、朱印船貿易時代に於ける彼等の通交貿易を取扱つてはゐるが、當の占城の國情については殆んど述べる所が無い。^(註4)私は偶々朱印船貿易史研究の途上、占城國に於けるその貿易港の所在地を知らんとして、手近かな占城史研究の著書や論文を涉獵して見たが、殆んどこれに觸れるものを見出すことが出来なかつた。そこで十七世紀初期頃の占城の國情に觸れた當時の關係文獻の中から、若干の史料を索めて、王都とその貿易港の所在を考定して見たが、尙不明瞭な點もあるので、茲に取あえず小編を草して關心を抱く方の示教を乞ふ次第である。

二 占城國末期の國都

一體我が朱印船が南洋各地に於いて貿易に従事した港灣は、大抵その渡航先の國々の首府か、又はこれに準ずるその地方の政治經濟の中心地か、又はその兩地に極めて接近した外港に當る地が多かつた。それが海港である場合もあり、又河港である場合もあつた。斯様な點を念頭に置いて、占城國に於ける朱印船の貿易港を索める場合、先づその首府が問題となる。しかし上述の様な諸研究の中には當時の占城國の首府やその貿易港との關係について餘り明確に記されてゐない。

試みに手近な大南一統志を播いて見れば、その卷十二、平順省の建置沿革の條に、次の様な記事があることに目がつく。

古爲_二日南徼外國_一。後爲_二占城_一。黎聖尊平_二占城_一、以_二國之南邊_一界_レ之。伸_レ奉_二職貢_一。大尊孝哲皇帝拓_レ地至_二潘郎江_一。江以西猶爲_二占城國_一。顯尊孝明皇帝、壬申元年、占城王婆爭叛。命_二掌奇阮有鏡_一擊_二破_レ之、擒_二婆爭_一以歸、改_二其地_一爲_二順城



第1図 潘里・潘郎附近現狀略圖 E

鎮。丁丑六年置平順府¹⁶⁹⁷、以潘郎以西之地、分爲
安福禾多二縣^(註5)之。

即ち十六世紀末安南國王黎の聖宗の占城國討伐後、同國の境域は南に壓迫されて、潘郎江 (Phan-Rang) 以西、後年の平順省一帶の地方に縮少されたが、壬申元年一六九二年占城國王婆爭が安南國軍に擒獲されて、全く安南國の統治の下に服屬する様になり、次いで五年同地に平順省が設置されて、その下に安福と禾多二縣が分置されたことを傳へてゐるが、その王都については述べる所がない。大南寔錄には、多少細部に涉つて詳述してあるが、矢張りその王都については別に加ふべき記載が見當らない^(註6)。然るに一統志の平順省の古蹟の條に、

占王故城

在禾多縣永安社^(註7)、舊省城之西南距十里許。昔占王所居、前有灰池一項、遺跡尙存。

とある。即ち此の文によれば、平順省の省城の西南十里の地禾多縣永安社に占城國王の王宮の遺跡が當時も尙存

してゐたことが判る。そこで同慶御覽地輿誌圖について平順省の地形を見るに、平順省城の東南に禾多縣莅があり、省城の南に沿つて東流するソン・ルイ (Song Luy) と縣莅の西を過ぎて南流する川とが、その南方に於いて合流して南下して海に注いでゐて、この川口を潘里海口又は潘里汛と呼んでゐたことが判る。これを現今の地圖と對照すれば、地輿誌圖と略々一致した地點にビンツァン (Binh Thuan)、ホア・ダ (Hoa Da)、パン・リ (Phan Ri) の三地點があり、パン・リにて海に注ぐ川を潘里江と呼んでゐるが、遺憾ながら手近な地理書では、禾多縣内に在る永安社の位置を確めることが出来ないけれども、何れにしても縣治を距ること餘り遠からざる地點であつたことに疑ひない。而して一統志の「禾多縣永安社、舊省城之西南、距十里許」とあるのは、上述の地名相互の關係より見て、東南の誤りで無ければならぬ。現に一統志の古蹟の他の條にも「順城舊鎮在禾多縣西北」とあるから、前記永安社こそ恐らく占城國末期に一時王都のあつた地點と推せられるが、此の記載だけでは、十七世紀末安南の顯宗阮福淵によつて征服された頃の國都か、或は稍々溯つて十七世紀初期の國都であつたか未だ明かでない。

三 オランダ船の占城貿易港

然るに一六〇七年五月オランダ東印度會社から派遣されたコルネリス・マテリーフ・デ・ヨング (Cornelis Matelief de Jonge) の率ゆる第二回東印度遠征艦隊は、支那貿易開始の使命を帯びて北航し、一六〇七年七月南支の南澳島に達し、先づ漳州官憲に對し、次いで廣東官憲に對して、修交貿易開始の折衝を續けること二ヶ月に亙るも成功せず、終に九月十五日同地を解纜して南航し、十月三日占城の海岸に到達碇泊した。彼の航海記に次の様な記事がある。

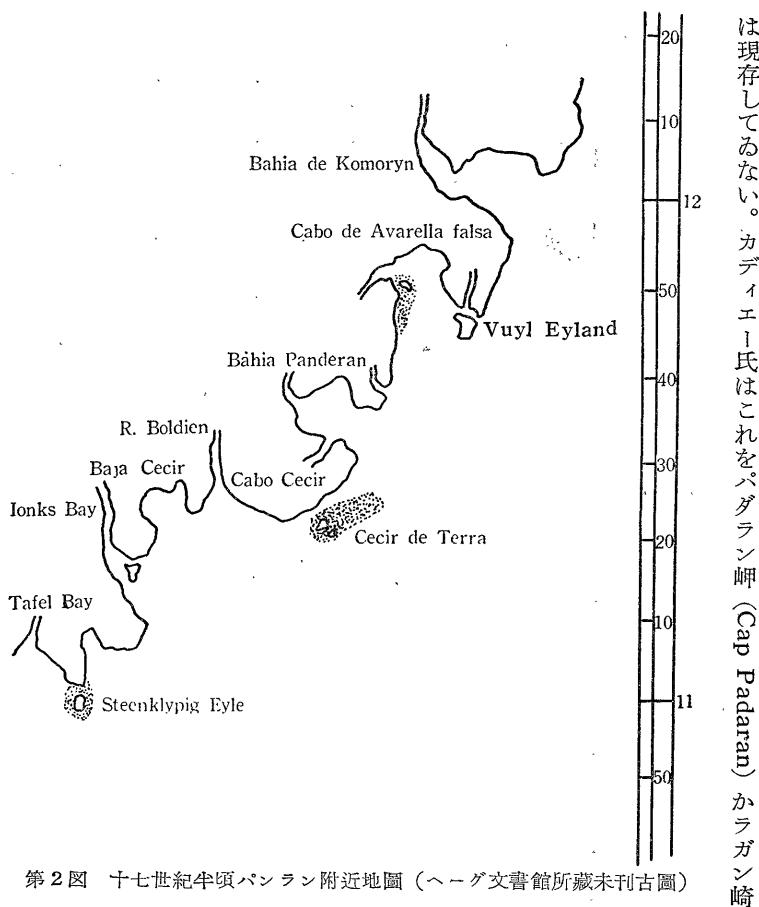
一六〇七年一〇月十三日、彼等はプロ・セシル岬 (Cabo de Pulo Cecir) から稍上手水深九尋の砂地に碇泊した。…

……次いで彼等は、澤山の飲食物の饗應を受けて、喧しい土民達を後に、再び出帆して同月十七日、前記の岬から約十五乃至二十哩隔つてゐると推せられる所に在るチャンパ國の碇泊地に到着した。十八日回教徒である官吏が來船したが、國王は異教徒にして、北緯十一度にある岬の北方にある大都會から餘り遠からざる所に王宮を構へてゐて同地には年々多數の支那人が來り、又ポルトガル船も年々一、二隻來航して、沈香、伽羅木、蠟、象牙及び黑檀を積取り、綿布、金、銀、胡椒を賣らす。…………二十日國王の叔父が筆頭官吏を伴つて來船した。…………會食中、司令官は

彼に向つて、國王が、毎年同國に蘭船二、三隻貿易に來航することを許すオランダ國王宛の書面を手渡さんことを乞へば、彼はこれに對して、國王も之を許し、その實現を熱望せりと答へ、且つ語を繼いで、同所の大河に日本船三隻來泊してゐるが、彼等は好しからぬ國民であるから、これを討拂ふのに、司令官が國王に助力せられ度き旨を申し出たが、司令官は、ポルトガル人を除いては、誰に對しても戰爭をしない。且つ又チャンパ人に敵對してまで、日本人達に助力しようとも欲しない。而も彼は自ら日本に赴かんと欲すと答へ、尙支那の海岸で出遇つた日本人海賊のことを話した。

チャンパ人はそれは尤な事であると答へた。^(註10)

こゝに譯載した一節の一部は既にカディエ氏 (Leopold Michel Cadier) も引用してゐるが、その地名の考定について不明確な點もあり、又王都と貿易港との關係についても餘り注意が拂はれてゐない。そこで先づ素直にこの文を解釋すれば、即ち、マテリーフの船團はプロ・セシル岬から十五哩乃至二十哩南航して、占城國の碇泊地に到つて投錨したが、同所に支那船やポルトガル船が年々貿易に來航し、同地から餘り遠からざる所に占城國王の王宮があり、此は北緯十一度餘にある岬の北方に位する都會からも近距離にあり、又同地に大河があつて偶々日本船も三隻來泊してゐたことが判る。而してこの航海記中にあつて、地名や位置の明示されてゐるのは、僅にプロ・セシル岬と北緯一度の二項のみであるが、此の地名



第2図 十七世紀半頃パンラン附近地圖（ヘーグ文書館所藏未刊古圖）

少し北方に位するグイオ崎の北方にある一都會の附近に在つて、同時に大河の河口に近く、且つ占城國の王宮も亦その附近

は現存してゐない。カディエー氏はこれをパダラン岬 (Cap Padaran) かラガン崎 (Pointe de Lagan) かの二者何れかに當るとして未だ確定してゐないが、^(註12) 十七世紀の半頃に作成されたオランダの古地圖と、現今の地圖とを對照すれば、同岬は寧ろプロ・セシル・デ・テラ島 (Pulo Cecir de Terra) の北東に突出した今のパダラン岬に當るものの様で、又此の外、北緯十一度に位する岬のことも記してゐるが、これは恐らく、北緯十一度四分に位するグイオ崎 (Pointe Guio) に違ひない。

さて以上の推定にして誤りなければ、當時支那、ポルトガル、オランダなど東西の諸國船が來泊した占城國の貿易港とは、パダラン岬から南西十五哩乃至二十哩にあつて、北緯十一度の

にあつたことになる。而して當時オランダの航海記などの一哩は、普通一度の十五分の一に當つてゐたから、十五哩乃至二十哩は、今日の一〇〇軒乃至一三〇軒餘に當つてゐる理で、今此等諸地相互間の距離や方位の關係と、上述安南の地誌などによる占城國末期の王宮附近の地形とを對比すれば、マテリーフの航海記に言ふ貿易港とは、パダラン岬の南西海路直航八十軒餘にありて、グイオ崎の北方二十軒足らずの地點にある潘里海口に當るものゝ様である。同地は潘里江の河口にあり河口に近く潘里があり、その地方に近く禾多縣莅があつて、縣内永安社こそ會て占城王の王宮もあつた所にして、上述の航海記の諸條件をも略々充した地點の様である。斯くて十七世紀初期の占城國王の王都とその貿易港の位置は一應略々確認された。

四 イギリス船の占城貿易港

その後暹羅の國都アユチャのイギリス商館では、新に占城貿易開拓の目的を以て、十六噸の一小船を艤装し、館員ロバート・バーヂス (Robert Burgis) を船長とし、ピーター・ホール (Peter Hall) とジョン・フェリス (John Ferris) を商務員とし、全水夫は日本人を以て宛て、同地に派遣して、貿易開始の交渉に當らせた。^(註14) フェリスは、目的地に到着後、一六一七年五月八日占城國のパリヤ (Paria) から、平戸のイギリス商館長リチャード・コックス (Richard Cocks) に宛て、交渉の經過などについて報告したが、その一節に、

予が貴下に送つた前便は、一六一六年 (一六一七年) 三月十三日附にして、ウィリアム・イートン君 (William Eaton) に託したものであるが、……………其の後商館長の希望並にイートン君の勸告にもよつて、ピーター・ホールと予自身に少し許りの商品を携へさせて、占城に於ける^{貿易?}を調査するため派遣された。……………國王も我々の來航に満足して、彼の國內何處にても來つて自由に貿易することを許可し、予が貴下に送らんと欲する商品は悉く供給せんと約した。^(註15)

とあるが、此の手紙の發信地パリヤについては、イギリス商館員書翰集を編輯刊行したウィリアム・フォスター氏 (William Foster) は、サイゴンに近いメコン河の東岸にあるバリヤ (Baria) ならんと推定してゐる。^(註19) しかし同地は恐らく當時は東埔寨の領域内にして、同世紀の半頃過ぎ安南國に併合された様であり、これは寧ろ發音も極めて類似し、而も上述の様に諸外船の出入した潘里 (Phauri) に比定せらる可く、當のイートンが、同年十二月二十日に平戸から東印度會社に送つた書翰の中にも、

予が當平戸に着いて後、去る五月十八日占城國パリヤにて認めたジョン・フェリスの書翰を受取つたが、その書翰にて、彼が之を認めるより一日前に、彼は同地の國王に贈物を獻じ、王は之を嘉納して、今後彼の國內何處にても關稅を拂はずして、自由に貿易することを、彼に許可した。^(註18)

とあり、若し此のパリヤが潘里とすれば、國王の居住する王宮は、極めて近距離に在つたことになる。そこで國王に對する贈獻を果して貿易許可を得て後、僅々一日前後の短時間内に、同地で此の手紙を認めることも可能であつた理である。

こゝで眼を轉じてエイモニエー氏の紹介した傳説を批判考證したデュラン師による當時の占城國の王侯達とその王都名に關する研究を見るに、一五九七年以來一八二二年に到る二十一代に互るバル・パングラン (Bal Pandaran) の歴代の占城の王侯達の中、最初の七代は殆んど潘里の出身にして、初代と六代目のポー・ルーム (Po Rome) を除いては、彼等の墳墓は何れも同地に在り、この王統の第二代はポー・ニット (Po Ni) と呼び、治世は一六〇三年より一六一三年に及び、第三代はポー・ジャイパラン (Po Jaiparan) 一六一三年—一六一八年、第四代ポー・エー・カーン (Po Eh-khan) 一六一八年—一六二二年にして、その王都は潘里に在つたと考定してゐる。^(註16) 此の場合潘里と永安社は極めて近距離にあり、又假令十七世紀初期占城國の王宮が永安社その地に無くとも、潘里を中心としてその近接地に在つたことに疑ひない。現に占城國

の遺蹟を調査したバルマンティーヤ氏 (Parmentier) も亦、

安南語で平順 (Binh Thuan) と呼ぶ此の省は、潘郎の流域と共に、占城國の最後の中心部であつた。……………十七

世紀の半頃占城の王國は、單に此の二地方に縮少し、その首府は潘里の近接地に下つたが、此の地こそガラテー (Gala-thee) 軍の將校が同國最後の國王を殺出した所である。^(註20)

と述べ、遺蹟調査の上からも、前説を支持してゐる様に思はれる。

五 朱印船の占城貿易港

さて我が朱印船の占城國渡航については、異國御朱印帳に依れば、慶長九年四月(一六〇四年)に西野與三、翌十年八月に有

馬晴信、十一年九月に林三官、十二年十月に有馬晴信に宛て、合計四通の朱印狀が下附されたことが記してあるが、^(註21) 彼等の貿易船が、同國の何處に渡航したか明かでない。又此等の船便に託して、慶長十一年八月徳川家康が占城國主に宛て、翌年

十月豊光寺承兌が同國執事老爺に宛て、次いで長崎奉行長谷川藤廣も亦占城國主に宛て書翰を認め、家康の命により白銀二十貫目を送つて伽羅木を求め僅に百斤を送り來たことを訊し、同國の使節の歸國に託して、國主夫人やその姉妹にも贈物を^(註22) 呈し、今後の通交と貿易の發展を要請したが、矢張り朱印船の渡航先も、その國都についても全く傳へる所が無いが、前掲

マテリーフの航海記に依れば、一六〇七年十月下旬には、明かに日本船三隻潘里海口附近に碇泊してゐたことが記してあり、こは我が慶長十二年九月のことにして、同年十月四日には、有馬晴信宛に唯一通朱印狀が下附されてゐるだけにして、他に記載も無いから、此等の三隻は朱印船に非るか、或は朱印狀下附の次第が記録に漏れたものかも知れない。

その後一六一七年三月に、前述の様に暹羅のイギリス商館より占城貿易開拓の目的を以て派遣した一船が、潘里海口に碇

泊した時、同地に亦一日本船が入港してゐた。再び一六一七年五月十八日潘里よりフェリスの出した手紙を引用すれば、

其の後商館長の希望並にイートン君の勧告にもよつて、ピーター・ホールと予自身に少し許りの商品を携へさせて、占城に於ける^{貿易?}を調査し、且又甲必丹庄兵衛に會ふために派遣されたが、同地から彼に託して若干の商品を日本に送らんことを見込んでのことであつた。五月四日同地に到着して（全能の神よ讃へられよ）庄兵衛が將に出帆せんとしてゐるのを知つた。そして我々が來着したので、彼は我々が急信を認めるまで、滞在することになつた。……………

貴下は甲必丹庄兵衛がピーター・ホールと予自身の手から、當占城に於いて尊敬する會社の銀子を、貴下の請求次第日本に於いて暹羅通貨一斤に等價の日本通貨七〇兩支拂ふことにして、請取つたことを諒承せられ度し。^(註23)

とあり、又同書の包紙にも、「庄兵衛殿の船に託送して七月四日に平戸にて受取つたジョン・フェリスからの書翰のコピー」と記され、同船の占城國潘里海口に寄港したことには疑いない。コックスの日記同日の條にも、庄兵衛船の長崎歸航について次の如く記してある。

タ方ニールソン君 (Nealson) 長崎から來着して、鹿皮三八〇枚と、同時に携帯した來たものに、暹羅にて一六一六年二月二十八日附がある三月十三日まで留め置き占城經由託送したウイリヤム・イートン君よりの書狀一通。

一六一六年六月一日附暹羅ユディヤ發ベンチャミン・フェリー君 (Benjamin Farry) よりの書狀一通。

一六一六年三月十三日附ユディヤ發ジョン・ジョンソン君 (Jno Johnson) とリチャード・ピット君 (Richard Pitt) よりの書翰一通。

一六一六年三月十六日附シー・アドヴェンチュアー號 (Sea Adventure) の航海士ジェイムス・バーデェス (James Burges) からの書翰一通。

一六一七年五月十八日附占城パリヤ發ジョン・フェレスよりの書翰一通。

日附無き占城の同地發ロバート・バーデェスよりの書翰一通。

此等の書翰は、何れも占城から庄兵衛殿の船で來たものであるが、その中には、ピーター・ホール、ジョン・フェリス及び航海士ロバート・バーデェス監督の下に、總額六八〇兩に上る貨物と共に、暹羅から小舟で占城に送つたものもある。^(註25)

即ち庄兵衛の船は、前掲パリヤ發のフェリスの書翰など六通と、イギリス商館の託送貨物を積んで長崎に歸航した。しかし此より先同年五月二十三日暹羅のアユチャから館員ジョンソンとビットが連名でコックスに送つた書翰の一節に、

庄兵衛殿に關しては、彼の同國人數人から若干聞いた所によれば、惡天候に見舞はれ漏水して、舵を失ひ、已むなく占城に寄港し、同地でその船に修理を加へてゐた由である。我々は今後幾許もなく彼が豫定通り長崎に向つて航海を續け、神が彼を無事同港に送り給はんことを切望す。^(註26)

とあり、庄兵衛船の潘里寄港は、最初からの豫定ではなく、惡天候のため已むなく入港碇泊したものゝ様であるが、此より先一六一六年五月二十六日暹羅イギリス商館長フェリーが平戸のコックスに送つた書翰に、

亦予は今長崎に向ひ出帆する船の甲必丹シヨビク^{庄兵衛}(Shobick)に當地で手渡した銀子の爲替を貴下に宛て同封したが、

彼は同地に到着後三十日以内に時價で日本銀三二八兩を貴下に支拂ふことになつてゐる。又前記シヨビク船に鹿皮四五六〇枚積込んだがこれは船積後ポルトガル人から買入れたもので(その爲めに符號を附けることが出来なかつたが)その値段は、貴下に宛て同封した送狀にて御覽の通りである。

且つ又前記甲必丹シヨビク船に、アンドリュース・ディタイ^{李旦}(Andrewes Dyty)の勘定にて鹿皮四四〇枚積込んだ

だ會社の四五六〇枚と共に合計五〇〇枚となるが、貴下は運賃として百枚につき二四枚手渡され度し。(註六)

此の文中ショービクとあるのは前記庄兵衛に違ひなく、エドモンド・セリス (Edmond Sayris) 暹羅航海記同年一月九日と十一日の條によれば、亦イギリス船シー・アドヴェンチュアー號は平戸からバンコクに着いて、同所に入港碇泊してゐる庄兵衛船に會つてゐるから、彼は日本から一旦暹羅に渡航して、歸航の途已むなく占城に寄港したのであつた。

その後朱印船の占城渡航の記事は内外の記録や文書に見當らないが、唯一六二三年十二月二十日 (元和九年) オランダ商館長コルネリス・ファン・ナイエンローデ (Cornelis van Negenroode) が同年の朱印船出帆狀況について報ずる所によれば、

暹羅に向ひ三艘、並びに同地から來航してゐた一艘も出帆したので、鹿皮買付けのため同地に派船の要なかるべし。：

……………東埔寨に向けても二艘、高砂即ちタイワン (Tangesangh ofte Taywan) に向けても三艘、交趾へも二艘、東

京へも二艘及び伽羅木買入れのため皇帝の資金を携へた一艘も占城へ出帆したが、本年當地にて伽羅木は一斤一貫一〇〇匁すれども、尙品拂底してゐる。(註七)

とあり、特に將軍が資金を託した朱印船が占城に向つてゐるが、前述の有馬船の占城渡航の際にも、家康は伽羅木買入れの爲め銀六〇貫目など託したと傳へられ、又長谷川藤廣も家康の旨を受けて、その購入のため銀二十貫目を託したこともある。(註八)しかし其の頃の朱印船の海外貿易の實情を傳へた異國通寶書にも「小國にて何の商賣も無御座候」とある様に、同地との貿易振はず、朱印狀の發給も僅か四回にして、元和九年派船を以て終つた様である。

六 支那船の占城貿易港

前述の様に、一六〇七年十月マテリーフ船團が占城の國都の外港潘里海口に碇泊した時、同地にポルトガル船の外、年々

多數の支那人が貿易に來航することを傳聞してゐるが、試みに丁度當時の同國の國情を傳へた張燮の東西洋考、卷二の占城國の名勝形蹟の條に、赤坎山を掲げ「占城王、爲^リ交趾^ト所^ニ逼^ス、徙^ニ居^ス于此^ニ」^(註32)とあり同地に國王が遷都してゐたことを記し、更に羅灣なる地に對しては「即占城港口」^(註33)と記して同地が貿易港として開かれてゐた様にも解せられる。然るに、赤坎山と羅灣の位置について、同書卷九、舟師考、西洋針路に印度支那半島東海を南航する針路を順次に辿ると、次の如く記してある。

新州交杯嶼 兩嶼相對、如交杯狀、故名。內打羊嶼 有小石塔、好拋船。內打水八九托、外二十托。煙筒山 此交趾占城分界處也。以狀似煙筒、故名。雖極澄鑿、亦頂上有氣鬱氣、用丙午針三更、取羊嶼、南有羊角礁、不可近。用丙午針三更、取煙筒、故占城分界處也。以狀似煙筒、故名。雖極澄鑿、亦頂上有氣鬱氣、更、取靈山 星槎勝覽曰、與占城山連接峻嶺、而方有泉、下繞如帶、山頂一石塊似佛頭。故名靈山。往來販船 伽楠貌山 港內有三嶼、潮過打水十五地、用坤未針五更、由圭龍嶼、取羅灣、即占城港口。

占城國羅灣頭 打水五十托、用坤申針五更、取赤坎山 赤坎山 宋時占城王常避交人、徙居玆山近。打水二十托、外十八托、用單申針四更、取鶴頂山 鶴頂山 打水二十五托、洋中有玳瑁洲宜防。若往又從赤坎山 單未十五更^(註34) 取崑崙山 東埔寨、由此分路。用單庚四更、取柯任山

とあるが、此等の地名の中、新州交杯嶼とあるのは、既にペリオ教授や山本達郎博士等の考定もある様に、今日の歸仁(Quinhon)^(註35)と確定され、又煙筒山とあるのは交趾占城分界の處とあるに依つて、バレラ岬(Cap Varella)に違なく、現に廣南國在住十年に及びオランダ商館の通譯を勤めてゐた日本人フランシスコ五郎右衛門が、一六四二年五月二十八日に提出した廣南國、即ち交趾國現狀報告は、全文三十項に上り、極めて興味あるものにして、その第二項にて、廣南國の南界をアベレ^(註36)レ(Averelle)と記してゐるが、これもバレラ岬に當るもので、當時も同地が交趾占城兩國の國境線の東端であつたことを示すものである。而してその南方の伽楠貌山は、港内に海面に出沒する三嶼があることが記されてゐるが、これは港口近く三岩嶋を擁する衙莊灣(Nha-Trang)に比定されるものの様である。

さて一應以上の三地名が決定されたとして、東西洋考中の船の針路に用ゐた方位と距離に關して和田清博士が考定された

所を参照し、改めて同書の西洋針路に検討を加へれば、新州から南航丙午三更にして羊嶼なる一島に達し、同島から更に丙午三更にしてバレー岬に達すと記してあるから、此の中間の羊嶼は、此の方面の航海の有力な一目標であるプロ・カンビル (Pulo Cambir) の島々かと思はれる。殊に南洋方面の航海に経験を有せる池田與右衛門が元和四年 (一六八八) に著した元和航海記に、印度支那半島東海を北航する針路について、

此バレーラよりブルカピンと云島まで、よき水あり、十二里あり。此のブルカピンは北南にあり、ちとあなせのかたへかゝりてあり。此ブルカピンは地山と一里あり。南の方に石あり、乍去石は外あり。又小山あり、やぎの角の如くあり。此ブルカピンは、地の方一里に少々たらず、沖をのればよし、地の方をのりても不_(註)苦。

と記してゐる。即ちバレー岬よりプロ・カンビルまで十二里あり、同島は北南の方にありと記してあるが、これは北西の誤寫なる可く、直に續いて和語にても「ちとあなせのかた」、即ち「一寸北西の方」と説明してある。而して同島と陸地との間隔は一里にして、島の南方に石あり、又小山もあつて、其の形山羊の角の如くして、プロ・カンビルの沖を航行するも、將又一里足らずの島と陸地との間を航行するも可なりと記しあるが、現にプロ・カンビル主島の東南に極めて接近して小岩島が若干あり、これをフランスの地圖では乳房の島々 (Les Mamelles) と名付けてゐるが、小山とはその中何れかを指すものに違なく、山羊の角の形をなせるとあるのは、「羊嶼……南有_(註)」とあるのに、その位置とその形状全く一致し、羊嶼がプロ・カンビルを指すことには殆んど疑もあるまい。但し東西洋考の距離とは幾分異つて、同島はバレー岬と歸仁港との中間より北に偏つてゐるから、この點を強いて難ずれば、丁度兩地の中間に位するラオ・マ・ニヤ島 (Lao Ma Nha) を指摘出来るが、東西洋考の距離間隔をそれ程まで嚴密に解せずとも差支へなかる可く、寧ろ各種の條件の合致したプロ・カンビルの島々を羊嶼に比定すべきものゝ様に思はれる。ついでバレー岬から更に南航丙午三更にして靈山に達し、同所より更に單午二更に

して衙莊灣に達すとすれば、靈山は兩地の中間より稍南方に在るパール岬 (Cap Vert) 附近ではあるまいか。ペリオ教授はこれをバレー岬に比定してゐるが、^(註40)バレー岬を煙筒山とすれば、この比定は無理の様である。

衙莊灣から坤未^(南西)に轉針して五更にして圭龍嶼を経て達する占城港口羅灣頭こそは、その距離、方位と發音より見て、正しく今日のパンラン灣 (Phan-Rang) なる可く、このことは曾てペリオ教授も漢籍中に見えるパンドランガ (Pandurang) なる論文中にて考定してゐる。^(註41)そこで又これと逆に、先づ最も確かな歸仁港とパンラン灣の二地を定めて置いて、その中間に

夫々前記の四地を、前述の方位と距離とに依つて配列しても、矢張この比定に略々合致して來る様である。而して若しこの比定にして誤りなければ、同所から更に坤申五更にして達する赤坎山は、その方位と距離とより見て、潘里海口附近か、或は尙幾分西方のグイオ崎 (P. Guio) 附近に當ることになる。形勝名蹟の條では、同地こそ占城國王が安南人に壓せられて

居を移した所と記してあるのに對して、西洋針路の中の同地の制註では、この移遷の時代を宋時代のことと傳へてゐる。宋代に占城が安南の李朝に壓せられてパンラン方面に移つた様でもあるが、その地が果して赤坎山であつたか否かは明かならず、^(註42)しかも東西洋考の時代には、王居は明かに潘里の北方禾多縣永安社附近に在つたから、寧ろ形勝名蹟の條の制註の文を取つて、此の場合の赤坎山を同地附近に求めても差支へあるまい。ペリオ教授は簡單に同山を遙か南西のサン・ジャック岬 (Cap St. Jacques) に當てゝゐるが、その理由も明示されてゐず、俄かに賛同することは出来ない。

尙附近の洋中、同所から單未十五更にして玳瑁州があるが、これもその方位と距離より見てプロ・セシル・ド・メール (Pulo Cecir de Mer) なるべく、又同地から單未十五更の崑崙山は言ふまでもなく、プロ・コンドル (Pulo Condore) の島々であるが、當時の航海指針の中にも、

尖城用^(註43)單丁四十里、見^(註44)山。又用^(註45)單申六十里、見^(註46)玳瑁州。玳瑁嶋用^(註47)單丁一百二十里、見^(註48)大崑崙。又用^(註49)庚酉二十四十五里、

見_ニ眞嶼_一又用_レ亥六百五十里收_ニ暹羅港_一。^(註44)

とあり、占城より南微東に四十里航して一山を望み、次いで西南微西に六十里航して同島に達し、再び百二十里南航してプロ・コンドルに達し、次いで西微南に轉針して四十五里にして眞嶼即ちプロ・ウビ(Pulo Obi)に至つて北西微北に六百五十里航して暹羅に赴くことを述べてゐる。而して占城の外國貿易については、前掲東西洋考の占城國交易の條に、

賈船抵_レ岸獻_ニ果幣干王_一。王設_レ食待_一之。國人狼而狻。貿易往往不_レ平。往販者少。^(註45)

とあり、我が異國通寶書の記事と均しく、貿易不振を傳へてゐるが、而もこの記事によれば、支那船の入港貿易した所は、王居に近い地點の様に推せられる。仍で若しこの推定にして誤りなければ、これは赤坎山附近海岸の碇泊地なる潘里海口より他に求めることは出来ない。

七 占城國終末期の貿易港

東西洋考の記事は、その序文が萬曆戊午四十六年(一六一八)に書かれてゐるから、先の蘭英の記事と略々同時代の占城國の國情を傳へたものであるが、その後四年、コルネリス・ライエルセン(Cornelis Reijerssen)指揮のオランダ南支派遣艦隊が一六二二年五月占城國の沿岸に沿つて北上し、二十六日プロ・セシルより進んでバンドラン碇泊地(reede Pandorang)に投錨したが、即ちその航海記に、

此のヤハト船はバンドラン碇泊地に向つて帆走し、碇泊地附近に到着して、支那ジャンク船二隻碇泊してゐるのを見た。

そのジャンク船から商人、按針手二名並に支那人數人が、粗末な贈物を携へて我等の船に乗船して來て、漳州を出た

もので、同地出帆後既に三ヶ月半を経過し、黒檀、犀角、象牙や其の他の商品買付けに來航し、積荷として燒物、金欄、粗惡な海黄や餘り價値もない商品を賣したが、船中にポルトガル品もポルトガル人から手に入れた品も積んでゐない。

又オランダ船や、ポルトガル船や、又イギリス船についても聞く所がないが、コンモリン (Commorin) にはポルトガル船二隻あり、同地でポルトガル人並に混血人一〇人乗組むジャンク船が一隻建造されたと語つた。……………

同三十日月曜日。……………次いで、又國王の命を帯びて一名我等の許に來り、國王は當地から僅か二哩離れてゐる所

の佛塔に參詣してゐるので、自ら國王の許に引返して、明早朝自由貿易の返事を國王から我等に齎らし、書信を届けようとして約束した。

同月三十一日火曜日。……………夕方前記の人が國王の許から我等の所に再び來て、國王はその居宅に歸つたと語り、食糧品を携へた住民を派遣しようと約束した。……………

ニエローデ君 (Sr. Nieuwoode) 並に他の商人等來船して、尙多量の食糧入手の見込も少いので、もつと多く手に入れ得るか否かを確めるために、國王に贈物を獻ずるを適當なりとした。

一六二二年六月一日。同日ニエローデ君とクロック君 (Sr. Croock) とが前述の贈物を携へて、これを國王に獻ずるために、陸地に航して、再び小舟で牡山羊と雞を持つて再び河から歸つて來た。^(註46)

と同地碇泊中に起つたことを色々記した後で、プロ・セシルと北緯一度半に在る前記パンドラン碇泊地及びその北方四、五哩のコンモリン灣の地形景觀を述べ、最後に占城人男女の風俗を描いてゐる。即ちパンドランはその緯度と發音の點より見て、正しく占城國の港羅灣、即ちバンランに外ならず、同地には當時支那船も入港して貿易し、國王も同地附近に來て、王居も亦その附近に在つたのでは無いかと解せられるが、又その北方のコンモリン灣とはカムラン灣のことなる可く、同地

にもポルトガル船二隻が碇泊してゐた。

その後一六四四年三月オランダ船團が東埔寨の貿易港ブン・ペン (Phnom-Penh) の前面で同國軍と衝突し互に砲火を交へて後、メコン河を下航し、その中リロ (Lillo) とハリング (Haring) の二船は副司令官シモン・ヤコブスゾーン・ドムケンス (Simon Jacobsz Dompkens) 指揮の下に針路を轉じて交趾に向つたが、途中ひと先づ多數の戦傷病兵を陸に揚げて手當を加へる爲め、七月十二日占城國のセシル・デ・テラ灣に投錨し、使を國王の許に派遣して來意を告げさせた。當時國王は狩獵に出で、獵兵隊と貨物車八百臺を隨へて、同地から六哩隔てたるカナ (Cana) に滞在中であつたので、使節は先づ同國に於ける自由貿易と國內旅行の自由に對するオランダ人の熱心なる要請を通じ、次いでドムケンス自ら從者十一名と通譯を同伴してクロアン (Croan) に赴き、接待のため派遣された四頭の象に分乘して進み、途中一夜露營して翌朝カナに達し大いに歓迎されたが、慣習に従つて跣足で國王に謁し、自由貿易の許可を得た許りでなく、領内に商館を建設することも勧められて、十九日クロアンに歸着し、翌日東印度總督に宛てたマライ文の國書を得て、同月二十四日に解纜して交趾のツーラン灣に向つた。(註47)

こゝに蘭船の投錨地セシル・デ・テラ灣は、固より潘里海汎の東に隣接してプロ・セシル・デ・テラを擁する港灣にして、カナはその北岸東方にある椰榔であるが、(註48)その後占城の國情安定せず、オランダ人は自由貿易の許可を得、商館開設を勧誘されたにかゝらず、その商船の渡航貿易するものも無かつた様である。次いで九年を経て一六五三年春には、前述の様に終に安南軍に征せられて領國の北部を割讓せざるを得なくなつた。大南是錄、大宗孝哲皇帝癸巳五年黎盛德元年 清順治十年 (一六五三年)春二月の條に、

初置泰康營。時占城國王婆娑侵_ニ富安_一。命該奇雄祿_ニ富安_一。姓_ニ缺_一、爲_ニ統兵_一、金差明武_ニ富安_一。姓_ニ缺_一、爲_ニ參謀_一、領_ニ兵三千_一、伐_レ之。軍至_ニ富安_一、諸將

皆欲^レ按^レ兵以誘^レ敵。雄祿曰、出^レ其不意、攻^レ其無^レ備、兵之善也。今我師還來、利在^レ速戰、何以爲^レ誘。乃進^レ兵、踰^レ石碑山虎
揚嶺、直擣^レ其城、乘^レ夜縱^レ火、急攻大破^レ之。婆朮遁走。略^レ地至^レ潘郎江、婆朮遣^レ子賣婆恩、奉^レ書請^レ降。雄祿以聞。上許^レ之、
命以^レ潘郎江爲^レ界。……………江之西仍還^レ占城、使^レ修^レ職貢。^(註49)

とあり、此の年占城は大いに敗れてその境域を潘郎江以南に縮少したことを傳へてゐるが、文中の富安は富安省治にして、
同省は北は平定省、南は慶和省に接し、その南境にある石碑山は、既にマスペロ氏も考定せる如く、バレー岬にして、東西^(註50)
洋考に交趾占城分界處とある煙筒山に當るが、これよりその境界を南に移し、安南に朝貢することゝなり、その國運は愈々
傾いて來た。その後イタリヤ人ゼメルリ・カレリ (Gemelli Careri) が世界週航の途、一六九五年七月十七日に占城の碇
泊地に投錨したが彼の航海記に、

日曜日、我々は順風に乗じてチャンパ王國の岸に沿つて航進し、正午頃同じ名前の灣と港の前に達したが、同所に諸
國民が象牙、奇楠香や其の他の商品の貿易に來てゐて、港口の前に岩礁があり、その中に高峻な山があつて、どの船も
こゝを過ぎねばならない。マレイ人は此の山をパンデロン (Panderon) (換言すれば國王) とプルシシン (Poulsisin)
岩礁と呼んでゐる。しかしポルトガル人は、後者にラボ・デ・アラ克蘭^(註51) (Ravo de Alacran) と云ふ名稱を與へてゐ
る。これこそ支那と往復するのに通過する危険な海峡の始まる所である。

と。一六九五年と云へば、占城國の最終末期である。ブルシシン岩礁とはプロ・セシル・デ・テラにして、パンデロン港と
はパンラン灣に當る可く、彼は當時でも、まだ同灣に外船が貿易に來航してゐたのを目撃してゐるが、同港灣に對して特に
國名を冠して呼ばれてゐた程で、古くから同國の海港であつたパンラン港が、十七世紀初期以來「占城國港口」として引續
いてその終末まで同國對外貿易の門戸であつたことも判る。

註

- 1 Maspéro, George. Le royaume de Champa. Paris. 1928. p. 241. note (2).
- 2 Arousseau, Leonard. Apropos d'un récent ouvrage sur le Champa (B. E. F. E. O. XIV. 1914. No.9) pp. 8~43.
- 3 Durand, M. E. M. Notes sur les Chams (B. E. F. E. O. Vol. V. pp. 368~86. Vol. VII. pp. 313~)
- 4 金永健、占城(チャム)と日本(印度支那と日本との關係)一五四~一六九頁。
- 5 大南一統志、卷十二。平順省、建置沿革。
- 6 大南寔錄、前編。卷四、大南皇帝寔錄上。癸巳五年春二月。卷七、顯宗孝明皇帝寔錄上。壬申元年秋八月。癸酉二年春正月。同三月、秋七月、八月。甲戌三年春八月。
- 7 一統志、同上、古蹟。
- 8 同慶御覽地圖說。二九二圖、平順省。
- 9 一統志、同上、古蹟。
- 10 Commerin, Iaac. Begin ende Vootagng van de Vereenigde Geoectroyeerde Nederlandsche Oost Indische Compagnie. Amsterdam. 1646. Vol. II. Sheep Vaert op Oost Indien onder den Admiraal Cornelis Matelief de Jonge in den jaeren 1605 tot 1608. pp. 119~21.
- 11 Cadier, Leopold Michel. Les Européen qui out vu le vieux Hué (Bulletin des Amis du Vieux Hué. 13 Annee No. 1930. pp. 296~97.)
- 12 ibid. p. 297 note (1).
- 13 Muller, Hendrik. Oost Indische Compagnie in Cambodja en Laos. s Gravenhage. 1917. Kaart van Cambodja en Grenslanden, uit de 17^e eeuw.
- 14 Letter from William Eaton to the East India Company. Firando in Japan, the 20th of December 1617. [C. Factory Record. O. C. 583.]
- Foster, William. Letter received by the East India Company from its Servants in the East. London. 1901~2. Vol. V. pp. 266~67. Vol. VI. pp. 258~59.
- 15 ibid. pp. 263~64.
- 16 ibid. p. 263. note (2).
- 17 鄭懷德、嘉定通志。Aubaret, G. Histoire et Description de la Basse Cochinchine. Paris. 1863. p. 2. 一六五八年に安南軍が柬埔寨を討つた始末を詳しく述べ、Moi-Xui(即ちベトナム)を奪取したものの様子を述べ。
- 18 Foster, Letters, op. cit. Vol. VI. pp. 258~59.
- 19 Durand. Notes. op. cit. pp. 372~3, 378, 383.
- 20 Parmentier, Henry. Inventaire descriptif des Monuments Cams de Annam. Paris. 1909. Vol. II. p. 6. Maybon, Charles. Histoire Moderne du Pays d Annam (1592~1820). Paris. 1919. p. 114. note (2).

- 21 異國御朱印帳。
22 異國日記。
羅山先生文集、第十二(刊本、第一)一三五～三六頁。金永健氏は長谷川藤廣の占城國に宛てた書翰を、元和九年のものとしてゐるがその理由を示してゐない(占城と日本。一六三頁)。當の藤廣は慶長十九年十二月長崎奉行から、堺奉行に轉じ、次いで元和三年十月に歿してゐるから、書翰の年次は恐らく慶長十四、五年頃のものと思われる。
23 Foster. Letters. op. cit. Vol. V. p. 263.
24 *ibid.* p. 264.
25 Cocks, Richard. Diary of Richard Cocks. Cape Merchant of the English Factory in Japan. 1615～1623. Tokyo. 1899. Vol. I. p. 2672.
26 Foster. Letters. op. cit. Vol. V. p. 266.
27 *ibid.* Vol. IV. p. 305.
28 Purnell, C.J. The Log Book of William Adams. 1614～19. (Transactions and Proceedings of Japan Society of London. Vol. XIII.～Part. II) p. 286.
29 Originele Missive van Cornelis van Nieuwroode uyt Firando in dato 20 Dec. 1623 [Kol. Archief 995]
30 通航一覽、刊本、第五。一七頁。
31 日本異國通寶書。
32 張燮、東西洋考、卷二、占城、名勝形蹟。
占城國末期の國都と貿易港について 岩生
- 33 同上。同項。
34 同書、卷九。舟師考、西洋針路。尙靈山の註は與占城連接山峻嶺の誤ならん。
35 山本達郎、安南史研究、一、一六～一七頁。
36 Pelliot, Paul. Deux itinéraires de Chine en Inde a la fin du VIII^e Siècle (B.E.F.E.O. IV) p. 205.
36 Declaratie van de gelegentheit des Quinamsen rijck door seeckeren Japanders genaemt Francisco, den 28^{en} May anno 1642 (Buch, W.J.M. De Oost Indische Compagnie en Quinam. Amsterdam. 1926. Bylage. p. 120)
尙ハチンミンストが長崎田島の日本人五郎右衛門なるもの、マーマン機旋泊中キランズ船ヨットマンスト (Huist) の決議錄一六五一年十二月十日の條に見えてゐる [Kol. Archief 1074]
37 Wada, Sei. The Philippine Islands as known to the Chinese before the Ming Period (Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko. No. 4. 1929) pp. 151～53.
38 池田與右衛門、元和航海記(海表叢書、卷三)三十三～三八頁。
39 Colonel Edel. Carte des Voies de Communication en Annam. 1925.
40 Pelliot, Paul. Textes Chinois sur Panduranga (B.E.F.E.O. Tome III.) pp. 216～17.
馮承鈞氏も恐らく此の説を無批判に受繼いで鑑山をベレハ岬に比定してゐるが(星槎勝覽校註、七頁)固より賛成し難い。大南一

統志'卷十。富安省'山川'石碑山の項參照。

41 Pelliott, Textes Chinois. op. cit. p. 652.

42 Maspero. Le royaume de Champa. op. cit. pp. 141~151,

339~40. 「統志'同十'卷十一。慶和省'建治沿革。

43 Pelliott, Paul. Les Grands Voyages Maritimes Chinois
au Debut du XV^e Siècle. (Toung Pao. Tome XXX.) p. 310.
(Note 3).

44 秋岡武次郎博士の所藏にかかゝる無題の航海指針は、元和航海記

に頗る類似した一本であるが、こゝに引用した漢文の水路誌を含

む一節のみは、青木昆陽の隨筆續草庶雜談中にある「海路」なる

一節と全く同文である。(日本經濟叢書'卷七。四二三~二五頁)

45 東西洋考'卷二。占城'交易。

46 Groeneveldt, Willem Pieter. De Nederlanders in China.
De eerste bemoeiingen om den handel in China en de

Vestiging in de Pescadores (1601~1624) & Gravenhage.
1898. Bijlage. pp. 337, 338, 340, 341, 343~44, 82.

47 Dijk, Louis Charles Désire van. Neerland's Vroegste

Betrekkingen met Borneo, Den Solo-Archipel, Cambodja,

Siàm en Cochín-China. Amsterdam. 1862. pp. 330~32.

Muller, O. I. Co. in Cambodia. op. cit. pp. 350~51.

此の兩書共にムトケンスの占城遣使紀行の概容を記してゐるに過

ぎないが、若しその全文が判明すれば、尙當時の占城の國情に關

して明かになる點があらうと思はれる。

48 一統志'卷十二。寧順道'關汛。

49 大南寔錄前編'卷四。太宗孝哲皇帝寔錄'上。癸巳五年春二月。

50 Maspero. De royaume de Champa. op. cit. p. 240.

51 Cadier, Le Europeens. op. cit. p. 307.
(昭和三十一年七月末日稿) (東京大學教授)